

今年度発掘調査の紹介

ようごんじ 用言寺遺跡

(上越市今泉字用言寺586ほか)

用言寺遺跡は、新潟県南西部の高田平野を流れる矢代川により形成された河岸段丘上に立地しています。遺跡からは、南西側に南葉山、火打山、妙高山などの西頸城山地、東側には遠く米山などの美しい山並みを見渡すことができます。

4月中旬から始まった調査で、平安時代（9世紀後半）～鎌倉・室町時代（12～15世紀）の遺跡であることが分かりました。平安時代の緑釉陶器・灰釉陶器、鎌倉時代の白磁・青磁など高級食器が出土しており、遺跡の性格を考える上で注目されます。

遺跡は、主に掘立柱建物と井戸が集中する生活域と、溝が並列する生産域とに区分されるようです。生活域は、遺跡範囲で最も標高の高い位置に設けられており、計画的に土地を使い分けていた様子がうかがわれます。

さらに、遺跡が災害に見舞われた様子も分かってきました。高田平野には、遺跡が立地する段丘を形成した矢代川や、その本流である関川など、繰り返し洪水を引き起こしてきた河川が多くあります。検出された平安時代の溝には、砂が厚く堆積していたことから、この溝は洪水によって短期間に埋まったと考えられます。また、室町時代の井戸からは、焼土や炭化した木材が多く出土しており、火災に遭った可能性が考えられます。このように、様々な災害に見舞われたであろう人々が、なおもこの地で繰り返し生活を営んできた様子が、徐々に明らかになってきています。

(近藤慎子)



生産域にみられる溝



鎌倉時代の道路状遺構に伴う側溝



鎌倉時代の掘立柱建物跡

かなや 金屋遺跡

(南魚沼市余川字蟻子山35-1ほか)

金屋遺跡は魚野川の左岸に位置し、魚沼丘陵から流れる庄之又川が形成した扇状地と県指定史跡蟻子山古墳群が存在する蟻子山の南東側丘陵裾部に位置しています。また金屋遺跡と平手川・近尾川を挟んだ南側約1kmには県指定史跡飯綱山古墳群が位置しています。金屋遺跡の発掘調査は関越自動車道本線部分の建設に伴い、昭和57・58年度に行われています。そして今回、関越自動車道六日町雪氷Uターン路建設に伴い、平成16年度から調査を行っています。

調査の結果、弥生時代と古墳時代の遺構・遺物が検出されました。弥生時代の遺構では掘立柱建物2棟や土坑などが確認できます。掘立柱建物(写真1)は西側が調査区外になりますが、1間×4間の側柱構造で、3m×7mほどの規模になると考えられます。柱穴は直径30~40cm、深さ40cm前後で、規格性がうかがえます。また、柱穴の1つから弥生時代中期頃の甕が出土しました(写真2)。古墳時代の遺構では竪穴住居や土坑・ピットなどが検出されました。竪穴住居(写真3)は、5m×4.5mの方形のものと、4m×4mの隅丸方形のものが重複して検出されました。方形の竪穴住居の床面近くからは甕がつぶれた状態で出土しました(写真4)。この甕は古墳時代前期の所産で、近畿地方の影響を受けたものです。このほか遺物包含層からも古墳時代の土師器が出土しています。

今後は昭和57・58年度の調査成果も加味し、蟻子山古墳群と金屋遺跡の関係、金屋遺跡と周辺集落遺跡、さらに南魚沼地域の開発と古墳群との関係などを明らかにしていくことが課題となります。(山崎忠良)



写真1 弥生時代の掘立柱建物



写真2 弥生土器の出土状況



写真3 古墳時代の竪穴住居



写真4 古墳時代土師器の出土状況

せいぶ 西部遺跡

(岩船郡神林村大字牛屋字西部1192ほか)

西部遺跡は越後平野の北東部、荒川^{あらかわ}右岸の標高約3mの自然堤防上に立地しています。日本海東北自動車道の建設に伴い、平成16年度に一部発掘調査を行いました。今年度は、その北側に隣接する2,200㎡について5月～11月の予定で発掘調査を行っています。今年度の調査で想定される文化層は6枚あり、現在、その最上層にあたる中世の遺跡を調査中です。

これまでに見つかった中世の遺構は、掘立柱建物^{ほったてばしたたもの}4棟・井戸^{いど}12基・土坑^{どこう}2基・柵列^{さくれつ}1条などがあります。井戸には、素掘り井戸のほか、井戸側と呼ばれる井壁の崩壊を防ぐための内部施設をもつものがあります。井戸側には、丸太材^{まげもの}を削り抜いて使用しているものや、角材や板材を組んだものなどが見つっています。ほかに、湧水を溜めるため底部に曲物を据えて水溜施設^{みずだめ}としているものなどがあります。

遺物は、輸入磁器^{はくじ}（白磁・青磁）、珠洲焼^{せいじ}、常滑焼^{すずやき}などの陶器類、漆器^{しゆき}・曲物^{まがもの}などの木製品、北宋銭^{ほくそうせん}（聖宋元寶^{せいそうげん}）などが出土しています。（調査担当者：山武考古学研究所 湯原勝美）



遺跡全景（南から）



掘立柱建物（上空から）



まるたくりぬ
丸太削貫き井戸



底部に水溜施設（曲物）をもつ井戸

報告書作成中の遺跡

やち 谷地製鉄跡

(三島郡出雲崎町大字大寺字丸山)

国道116号出雲崎バイパス建設に伴って、昭和63年度に発掘調査しました。島崎川の左岸、柏崎市荒浜砂丘から弥彦山・角田山に続く西山丘陵の裾部、丘陵と沢が複雑に入り組んだ地形に立地しています。この丘陵付近には、製鉄遺跡・須恵器窯跡が多く分布し、古代から中世にかけて大規模なコンビナートであったことがわかっています。

遺跡からは木炭窯3基と竪穴住居1軒、掘立柱建物1棟などが見つかりました。木炭窯は鉄作りのための燃料となる炭を作った窯です。鉄作りは砂鉄を原料とし、製鉄炉内で、1,300度を超える高温状態を作り、鉄と不純物を分離させます。いわば製鉄炉と木炭窯は切っても切れない関係にあります。残念ながら、この遺跡では、製鉄遺跡の本体である製鉄炉を確認することができませんでしたが、木炭窯の煙道や焚口に鉄滓が多く使われ、付近に炉が存在したことがうかがえます。木炭窯は、地下式でほぼ完掘できた1基（SX01）は長さ約5m、床面幅約1.1~1.3mを測ります。奥壁と両側壁に煙道を設けています。煙道は掘り抜きで、鉄滓を粘土で固めた障壁を作っています。2基は道路法線外に延びていたため奥壁まで完掘することができませんでしたが、推定5m前後であったと思われます。両側壁の煙道は確認し、調査できました。木炭窯3基のうち、床面が平坦で断面が方形に近いもの（SX01・03）と床面が湾曲し、断面が円形に近いもの（SX02）の2種類に分けられます。おそらく時期差をもつと考えられます。

鉄滓は鉄作りの際の不純物で、ほとんど捨てられます。この遺跡で出土した鉄滓は、製鉄炉の壁を細かくしたものがほとんどでした。製鉄炉の炉壁は粘土で作られ、炉の内側には鉄滓が付着します。様々な工程のものが出土しています。砂鉄から鉄を作る製鉄炉の壁、鑄造のための溶解炉の壁、鍛冶の滓など、一つの炉の滓だけではなくいろいろなものを集めて木炭窯の材料としてリサイクルしていたところがユニークです。

木炭窯の時期は長さが5m位、煙道を3か所にもつなどの特徴から11~13世紀頃と考えられます。11世紀頃の土器がわずかに出土し、この時期のものである可能性が高いと考えられます。断面円形の木炭窯は、方形のものより少し新しくなる可能性があります。

竪穴住居は9世紀末~10世紀初頭頃のもので、木炭窯の時期とは異なり、小規模な集落が存在したと考えられます。

現在、鉄滓の科学分析を行い、さらに詳しいデータを収集しています。木炭窯だけの製鉄遺跡ですが、この地域の製鉄遺跡が少しでも明らかになればと思います。

製鉄については、『埋文にいがた』No.50の埋文コラムに詳しい内容が掲載されています。



遺跡の存在した西山丘陵



谷地製鉄跡全景



SX01 木炭窯（断面方形）



SX02 木炭窯（断面円形）



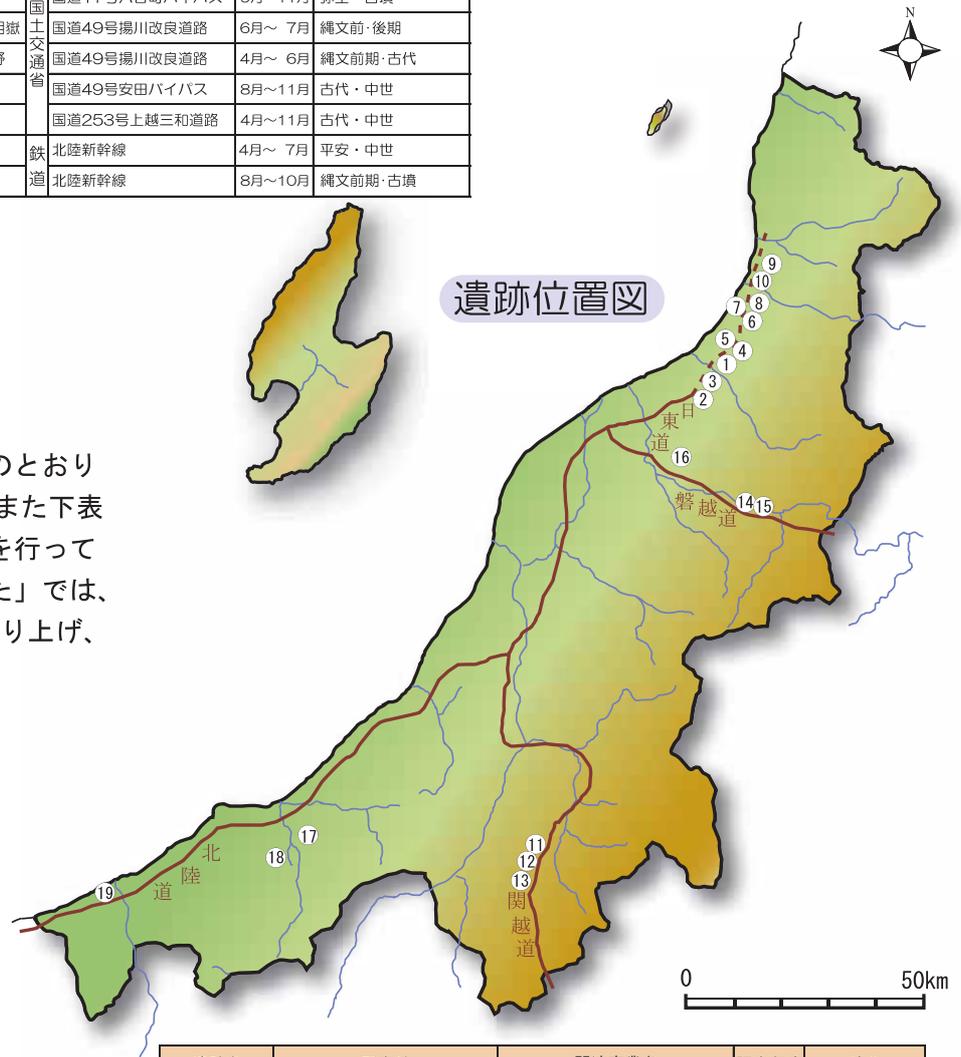
鉄滓を使った煙道の障壁

番号	遺跡名	所在地	関連事業名	調査期間	時代
1	野地遺跡	北蒲原郡中条町大字八幡字野地	日本海東北自動車道	5月～11月	縄文後期中葉～晩期前葉
2	土居下遺跡	北蒲原郡中条町大字塩津字土居下	日本海東北自動車道	4月～11月	古墳前期
3	沢田遺跡	北蒲原郡中条町大字赤川字沢田	日本海東北自動車道	5月～7月	古代
4	道下遺跡	北蒲原郡中条町大字古館字道下	日本海東北自動車道	7月～11月	縄文晩期
5	屋塚遺跡	北蒲原郡中条町大字大出字屋塚	日本海東北自動車道	5月～7月	縄文晩期
6	道端遺跡	岩船郡荒川町大字南新保字道端	日本海東北自動車道	4月～11月	古墳・縄文後期
7	中曾根遺跡	岩船郡荒川町大字金屋字中曾根	日本海東北自動車道	4月～11月	古代
8	桜林遺跡	岩船郡荒川町大字金屋字桜林	日本海東北自動車道	8月～9月	古代
9	西部遺跡(北)	岩船郡神林村大字牛屋字西部	日本海東北自動車道	4月～11月	古代～中世
10	西部遺跡(南)	岩船郡神林村大字牛屋字西部	日本海東北自動車道	5月～11月	古代～中世
11	金屋遺跡	南魚沼市余川字蟻子山	関越自動車道六日町雪水路	4月～7月	古墳・平安
12	北沖東遺跡	南魚沼市小栗山字北沖	国道17号六日町バイパス	7月～9月	古墳・平安
13	長表東遺跡	南魚沼市小栗山字長表	国道17号六日町バイパス	9月～11月	弥生・古墳
14	現明嶺遺跡	東蒲原郡阿賀町大字西字現明嶺	国道49号揚川改良道路	6月～7月	縄文前・後期
15	上野東遺跡	東蒲原郡阿賀町大字西字上野	国道49号揚川改良道路	4月～6月	縄文前期・古代
16	鴉塚遺跡	阿賀野市寺社字鴨塚甲	国道49号安田バイパス	8月～11月	古代・中世
17	狐宮遺跡	上越市門田新田	国道253号上越三和道路	4月～11月	古代・中世
18	用言寺遺跡	上越市今泉字用言寺	北陸新幹線	4月～7月	平安・中世
19	大角地遺跡	糸魚川市田海	北陸新幹線	8月～10月	縄文前期・古墳

平成17年度



遺跡位置図



平成17年度は上表のとおり19遺跡で発掘調査を、また下表の10遺跡の整理作業を行っています。「埋文にいがた」では、これらの遺跡を順次取り上げ、紹介していきます。

平成17年度



遺跡名	所在地	関連事業名	調査年度	時代
住吉遺跡	新発田市巾島字住吉	日本海東北自動車道	平成10・11年	中世
馬見塚遺跡	新発田市佐々木字中ノ割	日本海東北自動車道	平成11年	縄文・平安
正尺A遺跡	新潟市葛塚字子辰高入	日本海東北自動車道	平成13年	古墳前期
正尺C遺跡	新潟市葛塚字正尺	日本海東北自動車道	平成11・12年	古墳前期
野中土手付遺跡	新発田市野中野中土手付	日東道工事用道路	平成10年	古墳・平安
砂山中道下遺跡	新発田市湖南字砂山中道下	日東道工事用道路	平成10年	平安・中世・近世
東浦遺跡	妙高市大字毛祝坂字東浦	国道18号妙高野尻バイパス	平成4年	縄文・古代
坂井遺跡	見附市坂井町字下屋敷	国道8号見附バイパス	平成4年	中世
腰巻の塚	三島郡出雲崎町大字大門腰巻953	国道116号出雲崎町バイパス	昭和61年	近世
大慶寺御経塚	三島郡出雲崎町大字大寺字後山	国道116号出雲崎町バイパス	平成2年	弥生・古代・近世
谷地製鉄跡	三島郡出雲崎町大字大寺字丸山	国道116号出雲崎町バイパス	昭和63年	古代・中世

平成17年度 普及・啓発事業

センター見学、体験活動の受け入れ

毎年多くの小・中学生が当センターを訪れ、土器づくり体験、黒耀石こくようせきを使った野菜の皮むき体験、火起こし体験等に取り組んでいます。また、一般の団体に対しては、展示遺物の解説を中心に発掘調査の現状等を説明しています。なお、体験活動については予約が必要です。詳細は、事業団普及担当までお問い合わせください。



常設展示室及び新資料展示コーナーの展示替え

あおた 青田遺跡出土品の県外巡回に伴い、常設展示室の展示替えを行いました。また出土品展（右記）への出展に伴い新資料コーナーの展示替えも行いました。常設展示は、新に北野遺跡（旧上川村、縄文）出土遺物を中心に縄文人の生活の一端を紹介しています。新資料コーナーでは、須恵器すえきの窯跡たきでらを特集し、滝寺・大貫古窯跡群おおぬきこようせき（上越市）と梯子谷窯跡はしごだに（出雲崎町）の出土遺物を展示しています。この機会にぜひご覧ください。



滝寺古窯跡出土遺物

上越市
滝寺古窯跡群
平安時代

現地説明会、出土品展の開催

発掘調査が終了に近づくと、その成果を報告する場として現地説明会を開きます。日時等が決まりましたら事業団のホームページでお知らせします。また、平成17年度出土品展を下記の通り実施いたします。詳細はホームページをご覧ください。多くの方々のご来場をお待ちしております。

〈第1回〉

期 間 平成17年7月30日(土)～9月11日(日)

場 所 新潟県立歴史博物館企画展示室
新潟県長岡市関原町1丁目権現堂2247-2

展示品 平成15・16年度発掘調査遺跡出土遺物

※新潟県有形文化財（考古資料）に指定されたうらまわり浦廻遺跡出土遺物と上ノ平遺跡出土遺物も合わせて展示いたします。

〈第2回〉

期 間 平成17年10月29日(土)～11月23日(水)

場 所 津南町農と縄文の体験実習館「なじよもん」
展示室

新潟県中魚沼郡津南町大字下船渡乙835

展示品 平成16年度発掘調査遺跡出土遺物



第1回（県博会場）チラシ

各種刊行物の発行、ホームページの開設

埋蔵文化財センターのホームページを開設しました。事業団のトップページから入れます。

また、これまで同様に「埋文にいがた」（年4回発行）、「報告書」、「年報」を発行します。事業団のホームページに逐次最新情報を載せますのでご覧ください。

埋文コラム 「発掘から見えてきた楽器の歴史」

遺跡からは、楽器と思われる資料が数多く出土しています。また、古墳の副葬品である人物埴輪の琴を弾き、太鼓や鼓を打つ姿から、実際に演奏していた様子を知ることができます。いにしえの人々はこれらの楽器で、どのような音を奏でていたのでしょうか。

今回は県内の遺跡から出土した楽器、土鈴・土笛を紹介します。

土 鈴

日本の楽器の歴史は縄文前期までさかのぼります。土鈴や土笛、石笛が最初に登場しました。土鈴とは、粘土をこねて形を整えた後、焼いて作った鈴です。長野から山梨にかけての中部山岳地帯から関東西部の丘陵地帯にかけての縄文中期の遺跡から、多くの土鈴が出土しています。これらの土鈴は、球形、円筒形、土偶の形のものもあります。いずれも内部に1つないしは複数の「丸」が入っており、振ると「シャカシャカ」音を立てます。丸の素材としては、粘土玉、小石、有機質である豆などの例が知られています。現在の鈴のように小さな孔やスリット（鈴口）が開いているものもありますが、全くないものの方が多く見られます。このように縄文時代の土鈴は小型で密閉したものが多く、耳元でわずかに聴こえる程度の音しか出ません。縄文中期の球形、円筒形の土鈴は大半が建物内から出土するということから、屋内儀礼の楽器として使用していたのでしょうか。和島村の大武遺跡からは、日本最古級の縄文前期前半の土鈴が出土しています。写真では「鈴？」と思うかもしれませんが、右のX線写真から内部に「丸」が5～6個入っているのがわかります。スリットや小孔もなく密閉されているため、耳元でやっと「カサカサ」と聴こえる程度です。形は水草の実である「ヒシの実」にも似ています。当時の食料であった堅果類の生命力にあやかっても考えられます。どのような目的で使用したのでしょうか。



土鈴（大武遺跡）横4cm弱



X線写真

土 笛

吹き口とされる穴を1つ備える中空の土製品、土笛が縄文中期から登場します。後期～晩期に入ると吹き口のほかにもう1つの穴、指穴を持つものも出てきます。しかし、例え音が出たとしても、当時実際に土笛として使用したのかわからないものも数多くあります。吹き口と思われる部分が唇に当てるには不自然なことも。また、内部の「丸」が消失してしまっただけで、当時は土鈴であった可能性も考えられます。空きビンの口に唇を当て、息を吹き込むと「ポーッ」と音がしますが、ビンは飲料水の容器というのが本来の用途です。このように、出土した土製品を土笛と断定するのは難しいのが現状です。

長岡市岩野原遺跡（縄文中期前葉～後期後葉）の後期集落地域から直径約3.8cmの球形の土笛が出土しています。頭部に吹き口がついており、実際に吹いてみると「ピー」と甲高い音がするそうです。吹き口と直交方向に紐通しのような穴が貫通しています。この土笛を首に下げ携帯していたのでしょうか。



土笛イラスト（岩野原遺跡）

〈引用・参考文献〉「埋もれた楽器」春秋社 2004 笠原潔、「縄文の音」青土社 1999 土取利行

県内の遺跡・遺物49

ひだ 斐太遺跡（昭和52年 国指定）

遺跡所在地：妙高市（旧新井市）大字宮内字上ノ平・矢代山、大字雪森字百両山

斐太遺跡高田平野を見下ろす標高約80メートルの丘陵上に位置します。小さな谷を挟んで南北に並ぶ2つの丘陵の中央平坦地に住居が営まれ、北側を百両山地区、南側を上ノ平地区、矢代山地区と呼んでいます。

昭和30年代に東京大学が6軒の竪穴住居と1基の土坑を発掘調査し、弥生時代の防御性集落であることを明らかにしました。また、並行して行われた分布調査では、合計71か所の竪穴住居が確認され、北日本最大の集落遺跡であることが判明しました。さらにこれらの竪穴住居を取り囲むようにコ字状あるいは挟むように並行して周壕が巡らされており、畿内・西日本の防衛的機能を有する高地性集落との類似が注目されます。また、豪雪地帯のためか住居及び周壕は完全には埋もれない半埋没の状態で見ることができ、大変珍しい遺跡といえます。

この竪穴住居や土坑からは壺、甕、瓶、高杯、椀、器台、蓋等の北陸系の土器が出土しており、当時の文化の流れを考える上で貴重な遺跡です。

平成12年から4か年にわたり、新井市（当時）教育委員会がさらに南の丘陵尾根部の調査を行い、既に国指定されている3地区と同時期の遺跡の存在を確認し、平成17年3月に追加指定されました（矢代山B地区）。これにより、斐太遺跡がこれまで以上の規模、防御性を備えた大規模集落であったことが明らかになりました。

（写真・資料提供 妙高市教育委員会）



二重環壕確認状況



内環壕完掘状況



出土土器

埋文にいがたNo.51

発行 (財)新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒956-0845 新潟市金津93番地1
TEL (0250) 25-3981
FAX (0250) 25-3986
e-mail: niigata@maibun.net
URL: http://www.maibun.net
印刷 阿部印刷株式会社